

アフリカ史研究と史料批判

北川勝彦（関西大学教授）

このところ2、3年、勤務大学の共同研究でアフリカ史関係の史料を研究する機会が与えられた。現在、南部アフリカを旅したトーマス・ベインズ(Thomas Baines, 1820-1875)の日記類、イギリス東インド会社のケープ・エージェンシーの運営にあたったジョン・プリングル(John Pringle, 1769-1815)の記録、それにケープ商業会議所記録(*Records of Cape Chamber of Commerce*)などを見ている。これは、アフリカの歴史を研究する者にとって、史料に通じていることは言うに及ばず、その史料を批判的に評価できるように歴史の理論や歴史研究の核心をなす史料批判の方法にも通じていなければならないことを痛感させられる機会になった。

アフリカニストの歴史家は、アフリカの歴史を記述するにあたって、植民地化以前の時代については、数少ない記述史料を批判的に研究し、新たな史料を探すのにも熱心に取り組んできた。アフリカ史家は、非文字社会と文書史料の間に身をおき、対象とする社会に何が生じたのかを読み解くことを自らの任務とする。したがって、散在している史料から意味のあるデータを抽出するためには、史料批判の確かな技術や方法の修得を怠ってはならないであろう。

例えば、公開されたものや未公開の形で文書館に収蔵されているアラビア語の文書があり、重要な文書のコレクション、文献目録、文書館の手引きも作成されている。また、アフリカを訪問した初期のヨーロッパ人が書き残した文書史料がある。それらは、ヨーロッパ人の旅行者、商人およびミSSIONナリーの記録を指す。その中には土地の言語と人々を熟知した人物によって書かれたものもあれば、ごく短期間の滞在者が書いたものもある。後年、復刊、編集、翻訳が行われた史料も多い。確かに文書史料は豊富な情報を含むが、後世の人々が書き継いできた写本であることも多い。歴史家には、眼前の史料が何かを知り、どのような目的で利用できるのか、熟慮することが期待されている。

さらに、MISSIONや植民地政府の文書が挙げられる。その中にはアフリカ各地の事情について詳細に記録されているものもあるが、植民地支配下におかれたアフリカの人々から情報を得て書かれた多種多様な文書記録は、やはりその利用にあたって評価作業を欠くことはできないであろう。史料が作られ、伝えられる過程や解釈には政治性がつきまとうからである。史料を読み解こうとする歴史家にはこの史料が生まれた「政治の磁場」を究明する力量が求められる。植民地期の文書史料を批判的かつ創造的に読み、その記述の連続性、欠落および変更の考証に基づいて植民地期およびその後のアフリカの歴史を考察する必要がある。この作業は、目立たない地味なものであるが、アフリカの過去を読み解き、現在への認識を深め、未来を語る上で欠かすことのできないものではないだろうか。